国際経験は身近なもの？
―学生の海外渡航に関する意識調査―

細田　尚美
（香川大学インターナショナルオフィス）

Voices of Kagawa University Students on Traveling Abroad

Naomi HOSODA
International Office, Kagawa University
Email : hosoda@cc.kagawa-u.ac.jp

１．日本人学生は内向き志向か？

今年から官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN　日本代表プログラム」が始まった。これは、日本の学生の海外留学促進を望む企業からの助成金を基に、「産業界を中心に社会で求められる人材」「世界で、又は世界を視野に入れて活躍できる人材」となる若い世代に奨学金を提供し、国際経験を積んでもらおうとするプログラムである。選ばれた学生は、事前研修に参加し、留学後も留学生ネットワークに属して留学で培った学習や交流の継続をすることが期待されている[i]。

日本政府や産業界がこうした新プログラムを設立した背景には、海外に留学する日本人学生数が2004年の８万2,945人をピークに近年急激に減少している現実がある。2010年にその数は５万8,060人まで減少した[ii]。これに対して日本の大学側は、急減している理由として、①留年の恐れ、②留学のための資金難、③大学の体制の未整備等があり、特に大学生が就職等のために留年する可能性を懸念することが最大の問題だとみている[iii]。くわえて、文部科学省は、留学先の学年期間が日本の学期制度や新卒の採用時期と異なることも、留学を阻害する主要な原因だとしている[iv]。

こうした分析結果に対して、学生自身はどう感じているのだろうか。学生は海外留学と自分自身についてどのように考えているのだろうか。本報告は、筆者が実施した質問票調査の結果を、学生の視線からみた海外留学に対する思いやそのために必要な要件についての考察を加えながらまとめる。

２．調査対象者のプロフィールと調査の概要

質問票調査を行ったのは全学共通科目「国際社会と日本・日本語」の平成25年12月２日の授業においてである。本報告は日本人の海外留学意識をテーマとするため、当日の受講

者78人のうち、留学生７人を除く71人の日本人学生の回答を分析の対象とする。対象者の所属学部は、経済47人、教育16人、工６人、法２人、医・農は０人、性別は男性36人、女性35人、また学年では１年61人、２年５人、３年３人、４年２人だった。この授業は全学共通科目のため１年が極めて多く、さらに授業のタイトルからして、この授業を選んで受講している学生は国際社会について関心を持つ学生の割合が高いと思われる。また、12月２日の授業の前３回は、大学の海外研修に参加した学生の体験談（１回）と、日本に招聘中の外国人教員による異文化に関する講義（２回）を行っていることも、受講生の国際経験に対する意識に影響を及ぼしていると考えられる。

当日、学生はまず以下の質問(1)～(3)の回答を用紙に記述し、続いてその記述を基に５～６人のグループ内で各自の回答を述べ、最後に各グループの代表がグループ内でのディスカッションの様子を受講者全体の前で発表した。学生はグループワークとその後の代表による発表の感想を(4)に記載した。なお、この調査では、海外留学に限らず、様々ある海外渡航の形態（旅行、研修、ホームスティなど）について尋ねている。海外留学に絞って尋ねると、幅広い海外に対する関心を見落としてしまうと考えたためである。

(1)海外渡航経験の有無

(2)海外渡航について、①関心があり具体的に計画中、②関心はあるが具体的計画はない、③関心はない、のいずれか。また、その理由

(3)国際経験を積む意義について、意義があると思うか、思わないか

(4)グループワークとその後の代表による発表の感想

３．調査結果

【海外渡航への関心】

まず、(1)の海外渡航の経験ありは８名、海外渡航の経験なしは63名だった。ありと答えた学生は、海外研修、旅行、ホームステイのために渡航していた。

次に、(2)については、①が21名、②が47名、③が３名だった。①の回答者は、語学研修に参加と休暇中に旅行する計画との回答が多かったが、フィジーでの語学留学の後、３カ月程度ワーキングホリデー（経財、男、１年）、発展途上国でバックパック旅行（経済、男、１年）などの回答もあった。３年次に留学を計画中（経済、男、１年）と「留学」を明示して回答した学生は１名だった。

海外渡航に関心があるが、具体的な計画はないとの回答者は、実際に行動に移せない理由として、治安の問題、資金不足、時間のなさ、言葉の問題を挙げた。興味深いことは、回答者のなかに、明らかな理由ではなく漠然とした不安やイメージが湧かないという答え方をしている人が多々いる点である。例えば次のような記述である。

- 「学びにいくのでなく、単に旅行として海外にいってみたいという気持ちはあるが、まだ漠然としていてイメージがうまくできない」（経済、女、１年）
- 「実際、私の友人や後輩が、海外に行って、さまざまな経験を積んでいることに対して、海外に一度も行ったことがない私はうらやましさや、あこがれを抱くことがある。しかし、一度も行ったことがないゆえに様々な不安があり、実際に行動を起こせない大きな原因になっている」（経済、男、１年）

関心がないとの回答者は３名と非常に少なかったが、授業のテーマが国際社会と日本・日本語であるために、国際経験を積むことに関心がないと答えにくいことが反映し、実際よりも少ない数値になっていると推測される。関心がない理由としては、スポーツなど他のことに集中したいなど、別の関心事項があるためと記されている。

以上から、全体として、受講者は海外渡航には関心が高いが、過半数は具体的な計画がない状況が示されている。

【海外渡航の重要度についての意見】

「意義があると思う」との答えは61名で、「意義があると思わない」の７名や、「どちらとも言えない」の３名よりも圧倒的に多かった。ここでも、授業のテーマが国際社会と日本・日本語であることが大きく影響している点は否めないが、それでも受講生の間では意義があるとの意見の人が多いといえる。意義があるとの回答の理由には次のようなものがあった。

- 自分の目で見ることの大切さ（経済、女、１年）
- 語学が伸び、視野が広がる、自国の文化の再発見（工、男性、１年）
- 体験しないと分からないことが世の中にあると聞いて（工、男性、１年）
- 「グローバル社会」で生きるため（経済、女、１年）（教育、男、１年）
- 日本に来る外国人が多いため、彼らとのコミュニケーションには他国の言語・文化を知る必要があるため（教育、男、１年）

意義があると思わない、どちらとも言えない、という回答者の理由の例も挙げる。

- 「国際的な経験をつむことに価値を見いだせないなら無理に行く必要はない」（経済、男、１年）
- 「リスクが伴い、それがプラスに働くとも限らない」（工、男、１年）
- 「国際経験を積むかどうかは個人の自由」（経済、男、１年）

筆者の関心を引いたのは、意義があると答えた人のなかに、自分の成長のためだけでなく、グローバル社会では国際経験を積んでおくことが必要との意見が複数あった点である。学生の間で自ら「グローバル社会」を意識している人がいることが示されている。

【グループワーク等の感想】

最も多かったのが、今回グループ内で海外渡航や国際経験に関するディスカッションを行ったことで、海外へ行くための準備をしている人が予想以上に多いことに驚いたという意見である。たとえば次のような感想があった。

- 「世界的に見ると、日本人はあまり海外に出たがらない閉鎖的なイメージだったが、話してみると多くの人が海外に行ってみたいという願望があるとわかった」(経済、男、１年)
- 「海外へ留学したり研修に行ったりすることは手続きがたくさんあり、自分とは遠いものだというように勝手に考えていたけれど身近な人が留学の予定があるということを知り、国際経験がとても自分にとって近いものに思えた」(教育、女、１年)

その結果、「モチベーションが高まった」、「自分は意識が低いかと気付かされた」と述べている。逆に言えば、この「驚き」は、日常では海外に行くことについて、身の回りの人たちと会話することがない点を示唆している。友人・知人関係のなかでは同調意識が働くため、人々が特殊と考えるような事柄について自分の方から話題にしにくいという側面があるのかもしれない。その意味で、授業のグループディスカッションのような場は、通常、自分と同じと思っている人同士でも自らの意見を述べられる場合が多く、日常会話ではあまり話題にならない互いの思いを聞きやすいとも考えられる。

また、自分では考えたことがない意見、反対の意見が聞けたこと対する肯定的意見も多い。「明確な目標を持って（海外へ）いくかどうかについて意見が割れ、それぞれの理由が聞けておもしろかった」(経済、男、１年)、「自分のグループ内の全員が国際経験を積みたいと言ったが、一人一人自分のなかで考えている留学（の方法）や（行き先の）外国にちがいがあることが分かった」(経済、男、１年）などである。自分では一つの方向、あるいは一つの理由だけしかないと考えていたが、複数の人たちと話すことによって、物事の多面性が見えたり、多様な考え方あったりすることが、刺激となった様子が伺える。

４．国際経験について身近な人と語れる場づくり

本報告は、限られた学生に対する意識調査の結果ではあったが、今後の大学の国際化に

対して示唆的な傾向も伺える。第１に、国際経験を積む意義は知識としてかなりの学生に浸透している。その一方で、その思いを実際行動に移すにはイメージが湧かないなどの理由で、思いと行動との間にギャップを感じている学生が多い。治安の問題、資金不足、時間のなさ、言葉の問題等のよく知られた「行けない理由」が聞かれたが、それらの要素以前に、海外に行くこと自体をまだ身近に感じていない点も影響している。

そうだとすれば、第２に、「きっと自分と同じ」と思っていた人が実は海外渡航経験者だったり、真剣に海外渡航を考えたりしていることを知ること（実際そのような人は予想以上に多い）が、海外渡航を、自分にとって遠い人の話ではなく、まさに自分のこととして考え始めるきっかけになる。よって、学生の間の非日常ではなく、日常の会話に国際経験の意義やそのための方法が話題としてのぼる場づくりが、「内向き志向にみえる日本人学生」を変える重要な要素の一つになるのではなかろうか。

---

[i] 平成26　年度官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～募 集 要 項（http：//mext.s 3.amazonaws.com/2014/03/8 b 9 feb 45 a 071 dc 8 ae 7 c 40 c 654 a 589012.pdf）。

[ii] 文部科学省「『日本人の海外留学者数』及び『外国人留学生在籍状況調査』について」（平成25年２月８日報道発表）（http：／／www．mext．go．jp/b_menu/houdou／25／02／1330698．htm）。

[iii] 具体的には、①には「帰国後、留年する可能性が大きい」（67.8%）、②には「経済的問題」（48.3%）、③には「帰国後の単位認定が困難」（36.8%）、「助言教職員の不足」（26.4%）、「大学全体としてのバックアップ体制が不備」（24.1%）、「先方の受け入れ大学の情報が少ない」（10.3%）といった回答が入る。これは、平成19年１月に行われた国立大学協会国際交流委員会留学制度の改善に関するワーキング・グループが、各国立大学に対して留学制度の改善に関するアンケート結果であり、87大学が回答している（http：//www.kantei.go.jp/jp/singi/ywforum/dai 2/sankou 3.pdf）。

[iv] 文部科学省「日本人の海外留学の状況」（http：//www.kantei.go.jp/jp/singi/ywforum/dai 2/sankou 3.pdf）。